

第V章 全体評価

第Ⅴ章 全体評価

1 調査の概要

佐渡市の寺院建築をまとめるにあたり、まず、平成 19 年度から 21 年度において、佐渡島内全域にわたり寺院建築の概要調査を行い、2,165 棟の台帳を作成した。その中から文化財的価値が高いとされる 414 棟の寺院建築を選び、本堂、堂、鐘楼、門等、10 の区分を設け、建物を種類別に分類した。

平成 22 年度はこの中から建築年代が明確で、造形の規範となる物件を 10 棟選出し、以後の調査の基準とするため詳細調査を行い、報告書にまとめた。同様に、平成 23 年度には 2 棟を選出し、詳細調査を行い、報告書にまとめた。

平成 23 年度は上記 414 棟のうち、本堂と堂を寺院建築の中心施設と位置付け、その中から保存度の高い建造物、または建築史の流れの中で重要な位置付けができ、概ね建築年代がわかるものを基準に 106 棟※を選び出して調査対象とした。その後、江戸期には大日堂であった大日靈神社拝殿、現地調査の際に確認された東光院文殊堂の 2 棟を加え、計 108 棟の現地調査を行った。既往の調査物件 17 棟を加え、125 棟をこの報告書に掲載した。

次節より調査の成果を宗旨別に示し、調査物件から見た佐渡島内全体の特徴をまとめる。

(※実際には 108 棟を選出したが、1 棟は調査不可、1 棟は掲載不可)

2 宗旨別本堂

A 曹洞宗

対象物件 13 棟を調査対象とし、その全てが方丈（講堂）型である。

1) 間取

正面側に奥行 9 尺～12 尺程の前廊下を配する。前廊下の出入口は土間として一般的には露地と呼ばれている。また、土間とせず外部階段を利用して直接前廊下に至る場合もある。平面は通常前後 2 分割、左右 3 分割した六間取形式が多い。但し、東光寺本堂（赤泊地区）、太運寺本堂（真野地区）、大蓮寺本堂（羽茂地区）は左右を 4 分割した八間取形式としている。

前廊下側は外陣とし、背面側は六間取形式の場合は中央間を、八間取形式の場合は庫裏と反対側から 2 室目を内陣としている。

内陣に置かれる須弥壇は全て独立した「出須弥壇」形式である。内陣の両脇間は座敷、位牌の間とし、内陣の背面側には本堂から突出する形で開山堂を設けている。

2) 意匠

多くの場合、前廊下・露地境に独立柱が立てられ、梁間方向に繋ぎ虹梁が架け渡されている。内陣及び内外陣境には仏の座としての意匠（虹梁、斗組）が表現されているが、その他の部屋は総じて敷居、鴨居、内法長押、棹縁天井が用いられている。

3) 露地

東光寺本堂（赤泊地区）では間取から、また太運寺本堂（真野地区）では痕跡から、以前、前廊下の全面が露地（通土間）であったと推測される。これは新潟県内の五泉市（旧村松町）にある慈光寺の伽藍配置に良く残されている。

慈光寺では石段を登り、最初に三門に至り、三門の正面に中庭を挟んで本堂が建つ。本堂の右側は庫裏、左は座禅堂で三門の両脇には庫裏や座禅堂に至る渡り廊下を配する。庫裏と座禅堂は中庭に向かって外部からの出入口を設けるため、四角い中庭は本堂、庫裏、座禅堂、三門、渡廊下に囲まれていることとなる。各建物は中庭に面して通り土間を設け、土間のみを通って一周することができる。東光寺（赤泊地区）や太運寺（真野地区）はこの流れを汲むものであろう。但し、時代が降ると露地を設けず、外階段を設け、前廊下へ直接入る例が出てくるようである。

4) 建築年代

調査の結果、対象物件の中で東光寺本堂（赤泊地区）、千光寺本堂（羽茂地区）、太運寺本堂（真野地区）、海潮寺本堂（小木地区）、瑞芳寺本堂（両津地区）、正法寺本堂（金井地区）の6棟は、1600年代末期から1700年代前期、いわゆる江戸時代中期に入る本堂であることが確認された。

建築年代が古いため、屋根を始めとする各所に改造の跡が見受けられた。特に享保6年（1721）建築とされる正法寺本堂は明治30年（1897）に側柱、軒、屋根が全て取替えられ、向拝を増設し、入母屋造棧瓦葺の屋根となった。これにより、現況の外観からは近代寺院としか見受けられない。但し、内部は享保期（1716～1736）の姿がそのまま残され、前廊下に架け渡される一連の海老虹梁の曲線は、まさに享保期（1716～1736）のものであり、美しい姿を今に伝えている。享保と明治の工匠達の技術の高さが窺い知れる造形を持つ本堂である。

B 浄土真宗

対象物件 10 棟を調査対象とした。

1) 間取

正面側に奥行9尺の前廊下を配し、その中央に主出入口を設ける。前廊下は庫裏と繋がる。前廊下より奥は前後2分割、左右3分割とし、正面側（前廊下側）を外陣とする。やや規模が大きくなると外陣中央間・脇間境に2本から4本の独立柱を立て、虹梁を架け渡す。六間取形式の平面を基本とするが、外陣の独立柱を境として内陣側に矢来の間を設ける場合もある。背面側は仏の座として、中央を内陣、両脇を余間とする。最奥には後廊下を設ける。

2) 須弥壇

内陣において来迎柱を2本立て、その間に来迎壁を設け、その前に須弥壇を設ける。内陣内において独立した形をしているので、「出須弥壇」と呼ばれ、浄土真宗に限らずこの形が一般的である。

しかし、佐渡では「出須弥壇」だけでなく、「三連横並びの祭壇」が多数見られた。これは内陣の最奥部を横三間の祭壇とし、その中央部の祭壇に本尊を祀る形式で、一般的には「道場形式」と呼ばれている。新潟県内においては過去の調査例を見ても、道場形式を持つ本堂は極めて少ない。一方、長明寺本堂（相川地区）、願誓寺本堂（両津地区）、得勝寺本堂（金井地区）、大福寺本堂（相川地区）、因領寺本堂（新穂

地区)、西方寺本堂(両津地区)の6棟がこの形式であった。また、勝廣寺本堂(両津地区)と本光寺本堂(佐和田地区)は現在、出須弥壇の形をとっているが、以前は「三連横並びの祭壇」であったことが確認された。

三連横並びの祭壇は古い形式といわれるが、佐渡では1700年代後期までこの形式の事例が見られ、佐渡の浄土真宗本堂の大きな特徴といえる。

3) 御堂座敷

御堂座敷は一般的には本堂の中ではなく、庫裏の近くに配される。しかし、長明寺本堂(赤泊地区)、専念寺本堂(佐和田地区)、西方寺本堂(両津地区)では本堂内に御堂座敷が組込まれている。また、勝廣寺本堂(両津地区)と願誓寺本堂(両津地区)は以前この形であったことが確認された。総じて古い形式といわれており、これも佐渡における浄土真宗寺院の大きな特徴である。

4) 特徴のある本堂

a. 得勝寺本堂(金井地区) 本堂の規模と比較すると得勝寺本堂(金井地区)の両余間は3帖程の広さしかなく、極めて小さな余間である。そして、両余間の奥には4帖半の控室があり、内陣内部へ直接出入りができる配置で、かつ、この2部屋は後廊下で繋がっている。この形式を持つ本堂は新潟県内では確認されていない。なお、内装に新建材を多用しているが、基本的な骨格は残されている。宗教技法から見ても更に研究を進めたい事例である。

b. 立蓮寺本堂(新穂地区) 前述した間取を持つ本堂で、豪華な意匠を持つ。佐渡島内に限らず、全国的に見ても圧倒的にこの間取が多い。この本堂は棟札によると文化3年(1806)の建立である。これから見ても「三連横並びの祭壇」や本堂に組込まれている「御堂座敷」は古式であるといえる。

5) 建築年代

勝廣寺本堂(両津地区)、専念寺本堂(佐和田地区)は1700年代前期の建築であり、かつ豪華である。特に専念寺本堂(佐和田地区)は来迎柱まわりに大きく改造を受けているが、外陣に架かる虹梁は細身で、切れ味の良い意匠でまとめられ、見るものを圧倒している。

このように、佐渡では1600年代、1700年代の浄土真宗本堂が残り、この古さも特徴の一つである。

C 浄土宗

対象物件 8棟を調査対象とした。

1) 間取

正面側に奥行6尺から9尺程度の前廊下を配する。前廊下より奥は六間取形式とし、正面側3間は全て外陣とする。背面側は中央間を内陣とし、内陣の奥まった位置に来迎柱を立て、「出須弥壇」形式の祭壇を設ける。但し、大乘寺本堂(佐和田地区)は内陣奥に壁付の「三連横並びの祭壇」を設ける。内陣の両脇間は位牌の間、座敷とする。舟城寺本堂(新穂地区)や誓願寺本堂(両津地区)の内陣は外陣側に約6尺程突出した形となっており、内外陣境には中敷居跡が残る。特に舟城寺本堂(新穂地区)では、内外陣境から更に後設で外陣側に3尺程の張出しを設けている。大乘寺本堂では六間取形式の中で内陣を納めているが、外陣側に後設の框を付け、その上に柵を設けた痕跡が残されている。

2) 意匠

建築年代の古い事例では内陣以外の部屋は敷居、鴨居、内法長押をまわし、部屋境には建具を入れている。しかし、時代が降るにつれて、六間取の部屋境に虹梁を架け渡し、建具を入れなくなった。その結果、内陣のみが中敷居や背の低い高欄で区切られているため、広い堂内に独立して見える空間となった。つまり、内陣の両脇間と外陣が一室として繋がり、外光が内部へ行渡る明るい堂内となった。

事例としては法然寺本堂（相川地区）、大安寺本堂（相川地区）、廣源寺本堂（相川地区）が挙げられる。

その他、特異な例として、心岸寺本堂（両津地区）がある。この本堂の内外陣境の外陣側は墓股や斗組によって飾られるが、内陣両脇間・外陣境は内陣寄り1間分のみに格子欄間を配する。このような意匠とした理由は不明である。

3) 建築年代

調査対象8棟のうち舟城寺本堂（新穂地区）、心岸寺本堂（両津地区）、安國寺本堂（畑野地区）、大乘寺本堂（佐和田地区）の4棟は1700年代中期の建築である。特に舟城寺本堂（新穂地区）、心岸寺本堂（両津地区）は屋根を含め当初の姿が今日に伝えられている。両者共、軸部に若干の改造跡が見られるが、痕跡よりその復原は可能である。

佐渡島内に限らず新潟県内においても浄土宗寺院は少なく、その保存度から見ても貴重な事例である。

D 日蓮宗

対象物件 13 棟を調査対象とした。

1) 間取

正面出入口と接して奥行9尺～12尺程の前廊下を配する。この前廊下は庫裏と繋がっている。前廊下より奥は前後2分割、左右3分割とし、六間取形式の平面とする。中央間を内陣とし、背面側に須弥壇を配し、正面側は僧侶が法要を行う場とする。六間取形式とはいえこの中央間には、須弥壇のある背面側と法要の場境に間仕切はなく、上部に大虹梁や垂幕を配し、結界とする場合がある。両脇間は背面側の部屋を座敷及び位牌の間または開祖上人や諸仏を祀る部屋としている。調査対象13棟は規模の大小に係わらず、全てこの間取である。

2) 意匠

内陣以外の部屋は基本的には敷居、鴨居、内法長押を配し、棹縁天井で書院部屋とし、前廊下も含め控え目な意匠である。一方、内陣の意匠は豪華で、特に出須弥壇まわりにそれが見られる。内陣全体に虹梁、斗組、格天井や彩色を施し、須弥壇前の結界や前廊下境にも趣向を凝らしている。内陣・前廊下境の柱間では中敷居の構えとし、建具が入っている場合と無い場合がある。瑞仙寺本堂（相川地区）には内陣・前廊下境に蓐戸が入っていたと見られる痕跡（金具）が残されている。

内陣の豪華さは根本寺本堂（新穂地区）、安隆寺本堂（小木地区）、妙照寺本堂（佐和田地区）に見られ、かつ力強い。共に建築年が古く、その表現において当時の力を窺い知ることができる。また、安隆寺本堂（小木地区）、妙照寺本堂（佐和田地区）の向拝の唐破風や虹梁、斗組等に施された絵様彫刻は賑やかで、かつ力強い。妙照寺本堂（佐和田地区）は向拝軒の下端両脇に木彫の蟬をあしらひ、洒落気を見せている。

3) 建築年代

調査対象 13 棟のうち 5 棟が 1700 年代前期以前の建築で、比較的規模も大きい。この背景には金銀山の繁栄が影響していると考えられる。瑞仙寺本堂（相川地区）は寛永元年（1624）に建てられたとされるが、後世に須弥壇まわり、座敷まわりに大きな改造を受け、当初の姿へ戻す復原考察は困難である。向拝も華やかであるが後設である。ただし、前廊下の繋ぎ虹梁は虹梁の形をしているが絵様彫刻は一切なく、中世の意匠と考えられる程古風である。延宝 7 年（1679）の棟札が残る阿弥陀堂（金井地区）の繋ぎ梁には渦巻や若葉彫刻が施されており、瑞仙寺本堂（相川地区）の繋ぎ虹梁と比較すると後者の方が 1～2 世代程古い。今後、検証する必要がある。

E 真言宗

対象物件 宗教法人名簿には佐渡島内の真言宗寺院は 100 ヶ寺程存在し、必然的に調査対象も多くなり、21 棟を調査対象とした。

1) 間取

21 棟のうち国分寺客殿（真野地区）と弘仁寺本堂（羽茂地区）の 2 棟は八間取形式で、他は全て六間取形式の本堂であった。よって、六間取形式の平面で説明する。

正面出入口と接して奥行 9 尺程度の前廊下を配する。寺によっては両脇と背面に廊下を設ける場合もある。前廊下より奥は前後 2 分割、左右 3 分割とし、六間取形式の平面とする。2 分割された前廊下側は 3 室全て外陣とする。後列の中央間を内陣とし、須弥壇を置く。内陣両脇間を座敷、位牌堂などに供するが、庫裏側の脇間を寺の控室とする場合もある。また、向拝を設ける場合と設けない場合がある。

2) 意匠

内陣の須弥壇まわり、内外陣境の外陣側、外陣中央間・前廊下境の前廊下側、正面出入口の外側に装飾的な意匠を集中させている。また、時代が降ると外陣中央間の両側面も装飾化され、虹梁、欄間、斗組、格天井等を組み入れる。

他の諸室は敷居、鴨居、内法長押、棹縁天井と控え目な意匠で統一している。これは真言宗に限らず、どの宗派にも共通することで、方丈や講堂の役割を持たせていることを意味している。

3) 建築年代

調査対象 21 棟のうち、1600 年代建築の本堂は確認されなかった。しかし、1700 年代前期の建築は 6 棟確認された。

1800 年代に入ると本堂の規模は序々にではあるが大きくなる傾向にある。江戸時代末期では弘仁寺本堂（羽茂地区）、大慶寺本堂（金井地区）、国分寺客殿（真野地区）、明治時代以降では曼荼羅寺本堂（佐和田地区）、禅長寺本堂（赤泊地区）が挙げられる。

須弥壇は泉慶寺本堂（畑野地区）、遍照寺本堂（畑野地区）の 2 ヶ寺を除いて独立した「出須弥壇」で、前述の 2 ヶ寺の祭壇は内陣背面の壁に添って設ける「三連横並びの祭壇」である。近年その祭壇に若干の手が加えられているが、基本的な配置は変わっていない。泉慶寺本堂（畑野地区）には元禄 14 年（1701）の棟札があり、遍照院本堂（畑野地区）もそれとほぼ同時期の建築である。古い時代にはこのような祭壇が宗派を問わず存在していたことを窺わせる事例である。

F 天台宗

対象物件 佐渡には天台宗本堂は少なく、調査対象は弾誓寺本堂（相川地区）1棟のみとした。

1) 間取

平面は六間取形式の変形で、外陣の奥行を取るために、内陣の両脇間・外陣境よりも背面側に内外陣境を設けている。内陣には独立した円柱2本を立て、中央奥に座像の大仏を祀る。他宗派では見られない内陣の空間を持つ本堂である。

2) 建築年代

当寺には明治40年（1907）の棟札が保管されており、建物の様子から同記述を建築年代として差し支えない。

G 時宗

対象物件 佐渡には時宗の寺院は極めて少なく、調査対象は大願寺本堂（真野地区）1棟のみとした。

1) 間取

この本堂の間取には特徴がある。まず、正面出入口に接して奥行約9尺の前廊下を配する。次に、左右方向を3分割して中央に奥行のある内陣を設け、両脇間を前後2分割にし、外陣、座敷を納めている。

これとよく似た平面は日蓮宗本堂である。但し、この本堂は内陣と前廊下の中央に奥行1間の外陣中央間を設け、四方を虹梁で固めている。このような間取は佐渡はもちろん、新潟県内の既往の調査の中では確認されていない。新潟県内においても時宗寺院は少なく、今後の研究が待たれる。

2) 建築年代

当寺には明和元年（1764）の棟札が保管されている。斗組や虹梁に施された絵様彫刻の意匠から年号には妥当性がある。

H 単立・その他

対象物件 8棟を調査対象とした。

1) 間取

調査対象のうち、阿弥陀堂（金井地区）以外の7棟は元真言宗系である。全て江戸時代に建てられた本堂で、7棟は他の真言宗本堂と同様に、前廊下付の六間取形式の平面を持つ。

阿弥陀堂（金井地区）は延宝7年（1679）の棟札が現存している。間取は前後を2分割し、その周囲に前廊下と両脇廊下を配する。この脇廊下に挟まれた幅3間を内陣と外陣に分けている。よって、上記の六間取形式とはやや異なる平面をしている。

2) 建築年代

調査対象のうち、1600年代後期から1700年代前期に入る建築は3棟確認された。阿弥陀堂（金井地区）、彌勒院本堂（畑野地区）、真楽寺本堂（真野地区）である。また、1700年代中期以前の建物として、護村寺本堂（新穂地区）が挙げられる。

いずれも建築年代が古いため、改造の跡が見受けられるが、全体の骨格に大きな改造はない。装飾は少

なく、控えめな意匠であるが、施されている渦巻、若葉彫刻の意匠は洗練されている。総じて中世的な雰囲気を持つ本堂である。

3 種別の堂

A 多室構成堂

調査対象 13 棟を調査対象とした。宗教法人名簿に載らない堂であるためか、今まで建築的な考察が行われておらず、建築の調査が行われたのは今回が初めてである。

江戸時代、幕府は住職のいない所に檀家制度を認めなかったため、これらの堂は近郷近在の一般庶民によって今日まで伝えられてきた。その信仰対象は観音、阿弥陀等、多岐にわたる。

1) 間取

平面は仏を祀る宗教空間と、囲炉裏の間と称する生活空間に分けられる。その他、水屋や便所が設けられている。この形式は佐渡以外の土地ではあまり見受けられず、佐渡特有のものと考えられる。

宗教空間は一室として祭壇を置き仏を祀る形と、内陣、外陣に分け、祭壇を設ける 2 種類に分けられる。この他に囲炉裏の間に付くため、横長の平面となる形が多い。

調査対象の中で御梅堂（畑野地区）は宗教空間の脇に座敷を持つ本格的な庫裏が隣接している。また貞心堂（両津地区）は本格的な間取を持つ本堂の脇に生活空間である諸室が付いていた。この 2 棟は他の 11 棟とはやや趣が異なっている。いずれも庶民によって建築、運営が行われていたため、改造の度合いが大きい。

2) 建築年代

上記 2 棟を除く 11 棟の中から比較的保存度の高い建造物を以下に挙げる。

- ・正法寺観音堂（金井地区） 本来寺院境内の中には無いお堂で、移築の説もある。
- ・薬師堂（両津地区） 生活空間である部分は新しくされているが、宗教空間は良く残っている。
- ・吾湯藤堂（両津地区） 近年改修を受けたが骨格は残されている。
- ・閻魔堂（新穂地区） 現在の新穂支所の所から移築された堂であるが基本形は残されている。
- ・十王堂（真野地区） 内外部の骨格は残されている。

この他、野田堂（畑野地区）には天保 13 年（1842）と記された棟札が残されており、貴重である。調査対象の中で特に他と異なった価値を持つのが阿弥陀堂（真野地区）である。元禄 7 年（1694）に行われた検地帳には 4 間、3 間の堂があったと記され、嘉永 2 年（1849）の「阿弥陀堂再建奉加帳」には大破したと記される。明治 10 年（1877）の「佛堂据置願」には 3 間、3 間と規模が記載されている。よって、生活空間である囲炉裏の間は嘉永期に撤去されたものと考えられる。

室内は改造の跡が著しく、当初材は柱及び祭壇前列の虹梁程度である。虹梁に施された渦巻彫刻の意匠は古風で、江戸時代初めのものと考えられる。『真野町史 上巻』によると、文禄 2 年（1593）に上杉勢によって本堂は破却、焼払われたとされるが、その後徳川の時代となり、それまで弾圧されていた阿弥陀信仰が再熱し、再建されたものと考えられる。よって、西三川砂金山の歴史を示すものとして貴重である。

B 1室構成1間堂

調査対象 観音堂（金井地区）と東光院文殊堂（新穂地区）の2棟を調査対象とした。共に正面の間口寸法は約12尺であるが、正面の柱間の数が一つであるために1間堂とした。

1) 間取

観音堂（金井地区）は明治13年（1880）の「堂宇明細帳」によると間口2間、奥行2間の堂であったと記され、宝永4年（1707）創立と記された棟札があったとされる。現在の内陣は手法や部材の色合いから昭和戦後期に増設されたものと考えられる。よって、現在の外陣部分が古い部分である。また、外陣側面の中央柱には中敷居の痕跡が残るため、以前は内陣、外陣が12尺四方の堂内にあったと考えられる。木柄も太く、江戸時代中期の姿を今によく伝えている。

東光院文殊堂（新穂地区）の内部は中央祭壇前列の柱間に設けられた唐破風、木鼻、斗組とそれに施された絵様彫刻が力強く、かつ豪華で外観からでは想像できない。小堂ながら細部まで手法が整っている。

2) 建築年代

調査対象の2棟は観音堂（金井地区）が1700年代前期、東光院文殊堂（新穂地区）は1700年代中期の建築である。いずれも小堂でありながら、当初材の残存状況も良好で、残された痕跡から当初の形に復原が可能である。

観音堂（金井地区）は現存する小堂としては佐渡島内最古の部類に入り、今後の文化財研究の大きな指針となる建造物である。また、東光院文殊堂（新穂地区）は屋根も含めた復原が可能であり、佐渡島内の数少ない事例として貴重である。

C 1室構成3間堂

調査対象 間口の柱間数が三つあることから3間堂とし、25棟を調査対象とした。堂林観音堂（金井地区）は地元の多聞寺（金井地区）によって管理されている。その他22棟は寺院の境内に立地する。

1) 間取

全体の姿は長方形、正方形に分けられるが、場合によっては祭壇部分が本体背面の軒下に納まり構造的には下屋として取扱われることもある。

内部は1室空間と、内陣外陣の2室空間を設ける2種類に分けられる。蓮華峰寺護摩堂（小木地区）や智光坊金刀比羅堂（真野地区）は1室空間で、背面壁に祭壇が設けられている。宮本寺毘沙門堂（羽茂地区）や弘仁寺護摩堂（羽茂地区）は1室空間であるが、祭壇は独立形となっている。内陣、外陣に分かれる2室空間の場合は全て内陣背面の壁の前を祭壇としている。

2) 意匠

対象物件の数も多く、比較的小規模な堂であるため、信仰対象となる仏の種類も多く、技術的にも本堂に比べ自由度が高い。よって、造形の規範となる堂を2棟を挙げる。

a. 宝蔵坊観音堂（金井地区） 軒まわりが実に綺麗に整備されている。二軒平行繁垂木が四周にまわり、軒の意匠として省略化は見られない。論治垂木の位置も正確で飛檐垂木の先端を細くし、軒を軽やかに見せている。向拝も当初の作で、本体との取合いも綺麗でかつ豪華である。内外部の斗組も構造材としての

機能を担い、その絵様彫刻も力強い。様式建築として完成度が高い。

b. 智光坊金刀比羅堂（真野地区） 二軒平行繁垂木を四周にまわす。これだけでもその豪華さがわかる。特筆すべきは外部、内法長押から上部三手先斗栱の出桁に至る間を彫刻で埋めつくしていることである。ケヤキ材を多用し、材料は吟味されている。その反面、内部の意匠は控え目である。これは外観の豪華さを信仰の対象とした結果と考えられ、佐渡島内で最も装飾性の高い堂の一つと評価できる。

以上、様式建築の完成度の高さと外観の豪華な意匠の二つの観点より、これらの堂を紹介した。他の堂も多分にこれらの要素を含み、この2棟を造形の規範として、今後研究を進めることが望まれる。

3) 建築年代

安隆寺祖師堂（小木地区）、大蓮寺五百羅漢堂（羽茂地区）、蓮華峰寺護摩堂（小木地区）の3棟は1600年代後期の建築である。その他22棟はそれ以降の建築である。

調査対象として選んだ理由は比較的保存度がよく、建築年代の判定も概略判するという視点でしかなく、建築年代の分布に固執していたわけではないが、1世紀を3等分した建築時期の範囲にはほぼまんべんなく存在している。本堂のような寺院の中心施設ではなく、単独で存在する参拝空間として時代の流れに大きな影響を受けなかったためとも考えられる。

D 1 室構成5間堂

調査対象 正面の柱間の数が五つあることから5間堂とし、10棟を調査対象とした。全て仏堂形式の手法を用い、方丈（講堂）型本堂とは異なる濃密な空間を演出し、豪華でかつ力強い。なお、五郎兵衛堂（両津地区）は個人所有の堂である。

1) 本堂としての5間堂

国分寺本堂（瑠璃堂）〔真野地区〕、長谷寺観音堂（畑野地区）、清水寺本堂（観音堂）〔新穂地区〕は寺院の中心として本堂の役割を持ち、かつ本堂と呼ばれていた時期もあった。これら3ヶ寺は規模の大きい方丈（講堂）型本堂を設け宗教活動の中心施設と位置付けている。

3間堂である禅長寺瑠璃殿（赤泊地区）も間取りによるとかつては本堂と呼ばれ、現在の本堂は方丈（講堂）型本堂としているとのことである。このような事例は佐渡島内に他にも存在すると考えられる。

大乘寺本堂（観音堂）〔相川地区〕は復原考察によると内陣が外陣にむかって凸型の特異な平面を持つが、この堂も以前は上記のような役割を持っていた可能性がある。

2) 祖師堂としての5間堂

根本寺（新穂地区）及び妙宣寺（真野地区）には開祖上人を祀る堂があり、寺の象徴的な位置付けとなっている。この2ヶ寺には大規模な方丈（講堂）型本堂が別があり、宗教活動の中心となっている。また、他に3間堂の祖師堂も佐渡島内には散見される。

3) 独立した5間堂

大日靈神社拝殿（旧大日堂）〔新穂地区〕は元は修験道の建物として存在していたと伝わる。内陣を中心に密度の高い空間を演出し、江戸時代中期の建築ながら、軒や斗組において本格的な手法を用い、かつ向拝の造形も個性的で、全体に保存度が高い。

薬師堂（金井地区）は大勢の信者によって支えられている堂であり、江戸時代末期の建築ながら木柄も

太く、軒の手法も省略化されていない。屋根は大正期（1912～1926）に改造を受けているが、それにより更に均整のとれた外観となった。向拝、妻飾りが豪華である。

4 全体の評価

A 建築年代

1世紀を3等分して各建造物をあてはめた。下記に調査対象となった物件の建築年代の分布を示す。

種別・宗旨		1600年代			1700年代			1800年代			1900年代			計
		前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	
本堂	曹洞宗				6	2	1	2	2					13
	浄土真宗			1	2	3	3	1						10
	浄土宗					4	1	1	1	1				8
	日蓮宗		1	1	3	1		3	3		1			13
	真言宗				6	6	2	5			2			21
	天台宗										1			1
	時宗					1								1
	単立・他			3		2	1	1	1					8
	計		1	5	17	19	8	13	7	1	4			75
堂	多室構成堂	1			2	6		1	1		2			13
	1室構成1間堂				1	1								2
	1室構成3間堂			3	5	5	3	4	3	1	1			25
	1室構成5間堂		2		3	1		2		1	1			10
	計	1	2	3	11	13	3	7	4	2	4			50
合計		1	3	8	28	32	11	20	11	3	8			125

現在、佐渡島内では中世建築として蓮華峰寺金堂（小木地区、室町中期）及び蓮華峰寺骨堂〔小木地区、貞和4年（1347）以前〕があり、共に重要文化財の指定を受けている。近世初頭の作としては蓮華峰寺弘法堂〔小木地区、慶長14年（1609）〕と小比叡神社本殿〔小木地区、寛永17年（1640）〕があり、これらも重要文化財の指定を受けている。

今回の一連の調査の中で、中世の建築は本田寺（佐和田地区）境内に移築された旧獅子ヶ城裏門（1500年代の建築か）だけであるが、上記建築年代の表を見ると1600年代の建築が12棟、1700年代前期の建築が28棟あり、以後各年代（時代）にまんべんなく存在していることがわかる。このことは、桃山時代から近代に至るまでの寺院建築の歴史を編上げることが可能であることを示している。大まかながら、1600年代に建築されたの堂は重厚で閉鎖性の高い空間であり、1800年代に建築された堂は軽快で、開放的な空間であった。この形は近代・現代へと続いている。つまり、中世からの脱却と近代への移行と見ることができ、中間である1700年代は経済力の向上と技術革新の世紀であったと考えられる。

B 本堂の形式と空間の序列

境内（伽藍）に建つ3間堂、5間堂の中にはかつて本堂と呼ばれていたものもあるが、これとは別に広い参拝空間を持つ本堂（講堂）が建てられ、寺院活動の中心施設となっている。その他の本堂は全て畳敷きの広い外陣を持つ本堂である。本報告書では前者を「仏堂型本堂」、後者を「方丈（講堂）型本堂」とした。

方丈（講堂）型本堂が多い要因の一つとして、江戸時代に確立された「檀家制度」がある。檀家一同を本堂に集めることも重要な宗教活動であったと推測される。また、収容空間であるため、空間の序列が出来上がり、仏を祀る仏教空間、それを参拝する参拝空間で成立している。

数の多い真言宗本堂の例を挙げる。本尊を祀る空間は内陣で、祭壇（須弥壇）が設けられる。ここが宗教上一番価値の高い空間となる。次に外陣中央間である。その他、本堂内には貴人を受け入れる床の間付の書院座敷が設けられる。次に向拝を含む正面出入口付近である。

本堂全体は仏の座以外は和風書院としてまとめられているが、多くの参拝者は正面出入口付近や外陣中央間より参拝するため、内陣の祭壇まわり、仏の座、内外陣境の外陣側など参拝者の目に触れる場は必然的に装飾の度合いが高くなり、特に外陣中央間・前廊下境の前廊下側、主出入口の外部側、向拝に集中している。豪華になると外陣中央間境の両側面や前廊下も装飾される。装飾は虹梁、斗組、墓股、彫刻欄間の使用が主たる手法である。

C 建築の各部手法

1) 屋根葺材の変更

調査対象物件の大部分が以前は茅葺の屋根であったが、近代に入り、維持管理が困難との理由で桧瓦葺や金属板葺の屋根に替えられている。茅葺の屋根を替える場合、葺厚が約2尺程度となるため、その軒付分だけ軒の出が深くなる。茅に比べ桧瓦や金属板の厚みは極めて薄く、茅下地の上に直接これらの葺材を使った場合、軒先の線が後退し、雨落ちに支障をきたすことになる。対策として、今までの軒組の先に更に化粧垂木を入れて軒の出を茅葺きと同じにする手法を採っている。よって、現在の軒組の先に更に新しい垂木を設けている建物は、以前は茅葺であったと考えて差し支えない。また、茅は撤去せず、上から金属板で覆う場合もある。（対策として、旧茅葺屋根の軒付部分を補う化粧垂木を設けている。）

軒は正面側両隅に化粧隅木を入れるが、背面の両隅に隅木が入っていない場合がある。これは後述するが、セガイ軒の場合が多い。但し、この場合においても入母屋造もしくは寄棟造の屋根で茅葺は可能であり、小屋組を合掌形にして隅部を造り、茅の厚みでそれを調整している場合が多く見受けられた。



写真C-1-1 茅葺屋根



写真C-1-2 茅葺屋根形状の金属板葺

2) 軒の手法

a. **垂木軒** 垂木軒の場合、一軒と二軒がある。二軒は建物側を地垂木、軒先の垂木を飛檐垂木と呼ぶ。また、垂木の間隔により、繁垂木、半繁垂木、疎垂木と呼ぶ。

b. **セガイ軒** 内部の虹梁または、繋ぎ虹梁の先端を外部へそのまま腕木として延ばし、その先端に出桁を架けて軒を作る方法で、農家建築に多く見られる。

c. **軒の手法** 軒の手法で最も豪華なものは「二軒平行繁垂木」であり、いくつかの建物ではこの手法で四周の軒を作っている。しかし、この手法を採る場合、経費がかかることは自明の理である。多くの事例は人目に触れやすい面は垂木軒、そうでない所は垂木の間隔を広くする場合や、セガイ軒とする場合もある。また、外部は半繁垂木であるが、内部へ入ると、垂木間隔を1本分省略して疎垂木とする場合も多い。

d. **構造材としての化粧垂木** 本来地垂木は上屋列（内部）の桁に尻を架け、側柱上の桁にその中間部を乗せ、先端を片持梁として深い軒の出を支えるものである。二軒の場合、地垂木の上に飛檐垂木を重ねることにより、軒の出を確保している。ところが、地垂木が軒を支える構造材として機能せず、軒の荷重は枯木のみによって支えられ、地垂木自体は枯木から吊り下げられている場合がある。このように、本来は構造材としての役割を担っていたものが化粧材の役割しか持たない例もある。

e. **論治垂木** 二軒の場合、地垂木の先端に載る木負が化粧隅木と接する箇所には飛檐垂木を取付ける。これを論治垂木と呼ぶ。ところが、その取付位置が正規の位置から垂木幅の半分程外れている事例がいくつか確認された。また、論治垂木の筋に短い地垂木を取付けている場合も見られた。当時の工匠達の特徴的な手法であると推測される。

3) 斗組

斗拱とも呼ぶ。本来は上部荷重を支える構造材として位置付けられていたが、時代が降るにつれ、片側のみに意匠を見せる片蓋形式とし、化粧材としての役割を持つようになった。一見すると柱上部に斗組を載せ、上部荷重を支えているように見受けられるが、柱際の斗組は半割の張物で、肘木も柱に挿し込まれている。背面側を半柱として上へ延ばし、梁や桁を支える。



写真C-2-1 手前：垂木軒 奥：セガイ軒



写真C-2-2 外部は繁垂木(下写真と同一建物)



写真C-2-3 内部は疎垂木(垂木を1本省略)



写真C-2-4 構造として機能しない垂木



写真C-2-5 論治垂木筋にある短い地垂木

4) 本堂の須弥壇

内陣の背面壁に接して祭壇を設ける形と、内陣内に来迎柱2本を立て、その前に祭壇を置く独立型の2種類がある。本報告書では前者を「三連横並びの祭壇」、後者を「出須弥壇」とした。三連横並びの祭壇は浄土真宗で6棟、真言宗で2棟、浄土宗で1棟、計9棟が確認され、これらの本堂は比較的建築年代が古いため、古い形式と考えられる。その他は全て出須弥壇であった。当初より出須弥壇を持つ本堂であっても、後世更に手が加えられた事例も多い。古い時代には三連横並びの祭壇が今よりも多く、その後、出須弥壇となった事例も多かったことと考えられる。

5) 渦巻彫刻の意匠の時代差

一般的に円に近く、線の彫込みが浅く、かつ幅の狭い形を持つ渦巻程古いとされる。佐渡ではこれとは別に、瓜型をした渦巻彫刻も多用されている。これらは海路を利用して情報伝達が早いといわれる理由か、越後に比佐渡の方が若干新しく見える。また、上下両方から渦を巻込む意匠は佐渡独特で、新潟県内ではあまり見受けられない。

6) 本堂内に立つ柱の数と方柱の柱面の大きさ

方丈（講堂）型本堂においては建築年代が古い程堂内に立つ柱数が多い傾向にある。これは上部荷重を支える柱の数が多し程、柱1本当たりの荷重負担が小さく技術的に容易となるからである。その結果、外陣中央間・脇間境、座敷・外陣境の中間に柱が立てられることになる。

大勢の参拝者が入った場合、この中間の柱が邪魔になるため、柱を切断し、その下に大断面の差鴨居や虹梁を用いて、切断された柱を支える場合が見受けられた。宝暦期（1751～1764）頃からは技術的に進歩し、当初よりこの中間柱がなくなる。江戸時代末期から近代にかけては部屋の四隅にのみ柱が立てられる傾向が強くなる。また、方柱の場合、柱角を45度に面を採るが、柱見付け寸法に対し、面幅の比率が大きい程建築年代が古いとされている。ただし、これは複数の建物の年代比較の際の目安とされているもので、数字として絶対的なものではない。



写真C-3-1 上部荷重を支える斗組



写真C-3-2 片蓋形式斗組（正面側に出組）



写真C-3-3 片蓋形式斗組（背面側は斗組無し）



写真C-4-1 三連横並びの祭壇



写真C-4-2 出須弥壇



写真C-5-1 1600年代前期



写真C-5-6 元禄14年(1701)



写真C-5-2 1600年代前期



写真C-5-7 1700年頃



写真C-5-3 慶安元年(1648)



写真C-5-8 寛保2年(1742)



写真C-5-4 寛文6年(1666)



写真C-5-9 明和6年(1769)



写真C-5-5 元禄10年(1697)



写真C-5-10 文化11年(1814)

D 用材樹種と工匠

1) 用材樹種

本堂の形式と空間の序列の中で装飾の度合いについて前述したが、この空間の序列に添った形で上質とされる樹種が使われている。順に並べると、ケヤキ材、アテビ材（ヒノキ科アスナロ属、ヒノキアスナロと分類される）スギ材、クリ材、マツ材のようである。これらを用材として、空間の序列の高い材から使っている。スギ材はスギ面皮材として、座敷の床の間まわりに多用され、他は壁板、天井板として使われているが、構造材としては多くはない。

マツ材の使用容量は大きく、軒まわり、差鴨居、虹梁、桁、小屋組材として使われている。特異なのはツガ材であり、現代では高級木材とされているが、これを使用している建物が2棟あった。平成22年度に行われた詳細調査の対象物件で、佐和田地区にある旧真光寺山門（1600前期年代）と曼荼羅寺山門〔元禄14年（1701）〕である。旧真光寺山門は全てツガ材、曼荼羅寺山門は化粧水平材にツガ材を使用している。現在でも総ツガ造の建築は梅普請と呼ばれ、高級な邸宅でしか使われていない。

旧真光寺の山門の円柱は径が約1尺で、ツガ材としては大材で、かつ佐渡島内ではあまり見受けられない材であるため、海を渡って運ばれた可能性がある。

2) 工匠

比較的文献や研究史料中に取上げられる工匠を列記する。

a. 佐州羽茂村山 高野甚右衛門

蓮華峰寺護摩堂〔小木地区 元禄3年（1690）棟札〕

安隆寺本堂〔小木地区 宝永7年（1710）堂内墨書〕

b. 羽茂本郷 藤井五郎右衛門

遍照寺本堂〔赤泊地区 寛政2年（1790）棟札〕

c. 五十里 間島杢太郎

禅長寺本堂〔赤泊地区 大正6年（1917）棟札〕

薬師堂の須弥壇改造〔金井地区 大正14年（1925）堂内墨書〕

d. 五十里 明石近陽〔彫刻師（宮大工）〕

曼荼羅寺本堂 内外陣境彫刻欄間〔佐和田地区 大正10年（1921）欄間裏面墨書〕



写真C-6-1 外陣と脇間境に2本の柱(1700年頃の建築)



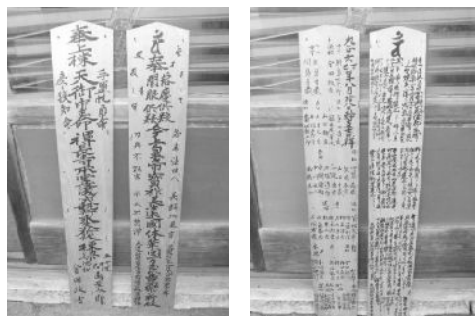
写真C-6-2 外陣と脇間境に柱なし(大正6年)



写真D-2-1 蓮華峰寺護摩堂 棟札



写真D-2-2 遍照寺本堂 棟札(左:表面 右:裏面)



写真D-2-3 禅長寺本堂 棟札(左:表面 右:裏面)

E 今後にむけて

平成 23 年度は本堂と堂の調査のみで門、鐘楼、庫裏などは調査対象としなかった。今後は平成 23 年度調査をもとにテーマを定め、更に深く調査研究を進めると共に、門、その他の調査研究も進めることが望まれる。また、佐渡以外の地域の比較研究も必要と考えられる。古き良き佐渡の山野を駆け巡る寺院建築史の研究は序についたばかりである。



写真 D - 2 - 4 曼荼羅寺本堂 欄間墨書